

3園合同研究会の取り組みから 日々の生活の中でのつながり

その1

佐々木麻美

杉浦真紀子

(幼稚園教諭)

お茶の水女子大学には、附属幼稚園、附属
いずみナーサリー(以下ナーサリー)、文京区
立お茶の水女子大学こども園(以下こども園)
と、同じキャンパス内に3つの異なる乳幼児
施設があり、日常の保育の中で、学内で自然
に出会ったり、季節の行事の折に交流したり
しています。2016年に立ち上げた3園合
同研究会を基盤として、それぞれの研究会や
公開保育、フォーラム等に参加しあうことを
重ねてきました。さらに2018年、附属幼
稚園が、文部科学省の研究開発校に指定され、
「幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚

園の教育課程の編成及び保育の実際とその評
価の在り方について」というテーマで研究を
始めるにあたっては、ナーサリーとこども園
の協力を得ながら、互いの施設の保育に参加
し、2歳児の育ちについて語りあう時間を少
しずつ重ねられるようになりました。

こうした3園の交流・連携の経緯や保育実
践について、2019年の日本保育学会におい
て、初めてポスターによる発表を試みました。
園の枠組みを超えて研究に取り組むことで、
子どもの育ちが0〜5歳とつながっていく
ことが実感できる

佐々木麻美(ささき あさみ)
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

杉浦真紀子(すぎうら まきこ)
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭

・ 日常の中の偶発的な出会いを生かすことで、子どものみならず保育者同士の学びが深まる

・ 3園の保育のつながりが感じられる

等の気付きが得られ、学びにつながりました。3園は、施設の形態が異なり、流れる時間や空気感も異なります。それでも、日常の出会いや、子どもを真ん中にして語りあう時間を重ねていくことの大切さを、あらためて感じることができました。

今回は附属幼稚園の環境を生かした実践の事例を報告します。

報告① ジャガイモを届ける

附属幼稚園の4、5歳児は、6月にジャガイモ掘りに出かけます。畑は園から電車に乗って行く場所にあるため、3歳児は幼稚園で留守番でした。そこで5歳児は、自分たちで

掘ったジャガイモを翌日、園で待っていた3歳児に、お土産として袋に入れて渡しました。また、こども園やナーサリーにも届けようと段ボール箱に詰め、数人ずつで抱えて出かけて行きました。自分たちで掘って食べるだけでなく、このように園を超えて人とつながる場所があることは、とてもうれしいことです。こども園では、迎えてくれた子どもたち一人ひとりにジャガイモを手渡すと、両手で大事に持って「ありがとう」

と笑顔を見せてくれました。ナーサリーでは、小さい子どもたちが「なんだろう？」と段ボールへ手を伸ばし、ジャガイモを触る姿を、5歳児がじっと見ていました。先生方も後日顔を合わせたとき



に、ジャガイモを料理して食べたときの子どもたちの様子を話してくれます。子どもたちの足で届けられる距離に3園があることで、ジャガイモ掘りの経験が人と人のつながりを豊かにしてくれました。

報告② 影絵を観に来てもらう

附属幼稚園では毎年12月の終業式の日、子どもたちと保護者に向けて影絵を上演します。昨年度は「アラジンと魔法のランプ」でした。この影絵は、教員が人形や背景を手作りしたもの、代々大切に補修しながら使い、教員自身が演じます。11月下旬になると舞台を設置し、セリフをテープに吹き込んで準備を始めます。それから、人形、背景、音響と役割を分担後、人ともとの背景が自然に動いて見えるようにタイミングや位置を合わせて動かし、体に染み込ませるように日々練習を重ねます。

上演する影絵には、私たちも思い入れがあり、ぜひ子どもたちにも観てもらえたらと、別の日に小さな上演会を開いて招待すると、5歳児の約20名が幼稚園まで足を運んでくれました。玄關で靴を履き替え、わいわいと話しながら、遊戯室の舞台の前に着きました。部屋がだんだんと暗くなり、音楽と共にスクリーンに影が映し出されると、「はじまったー」という喜びの声と題名を読む声が入る。裏で必死に操作をする私たちにも、次第にじつとスクリーンに見入る息遣いが伝わってきます。お姫様が、ランプ売りに化けた悪い魔法使いに気づかず、古い魔法のランプを新しいランプと交換してしまふシーンでは、「あげちゃだめ!」「あくあ」と思わず声が出ます。上演後、



子どもたちの感想で、「どうやっていたの?」と聞かれました。実際に使っていた人形を目の前で動かし、仕掛けを見せたときのぐっと惹きつけられていた顔は忘れられません。

その後、こども園の先生から、影絵ごっこが始まったと聞きました。幼稚園の子どもたちと同じものを見て、何か感じる時間があるのなら、とてもうれしいことです。

報告③ クリスマスツリーを見るに……

冬休みのある日、ナーサリーの子どもたちが附属幼稚園の園庭で遊んでいたときに、クリスマスツリーを見に来たいと言ってくれました。幼稚園の静まり返った玄関に、子どもたちが飾りを付けたクリスマスツリーがあります。1〜2歳の小さな子どもたちはツリーを見上げ、触ろうと手を伸ばし、そのうちツリーの周りをぐるぐる回り始めました。冬休

みになり、幼稚園での役目を終えていたツリーも、小さな子どもたちに囲まれ、どこかうれしそうでした。そして先生が「うさぎのはらのクリスマス」を歌うと、子どもたちも一緒に歌い始めたので、急いで卵型マラカスを出してきて渡しました。手に持って鳴らしたり飛び跳ねたり、楽しい気持ち音がリズムになって、体が弾んでいました。ほんのひと時のことでしたが、幼稚園の子どもたちといろいろな飾りを作ったツリーを飾った時間とつながった、ほんわかとした温かい時間でした。



こうして近くにある3園が、それぞれの生活がありながら、日々の中でつながれる時間を、大切にしていきたいと思います。